

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：95401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01989

研究課題名(和文) 日本軍兵士の精神構造の分析 兵士の手記を通して

研究課題名(英文) Analysis of Mental Structure of Japanese Soldiers: Through Soldiers' Notes

研究代表者

青木 秀男 (Aoki, Hideo)

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員

研究者番号：50079266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦場における兵士(学徒兵と農民兵)の精神構造、及び戦後における元兵士の体験記憶の変容を分析した。本研究は社会学と宗教学の学際的研究として、互いの関心・理論・方法をすり合わせて進められた。死に臨んだ兵士の生と死の相克と最後の死の受容、兵士をそこへ駆った境遇(イエ、世間、国家)、時代のイデオロギーの情緒的な身体化、さらに戦後における戦争記憶の持続・忘却・変容、戦没者に寄せる複雑感情。本研究はこれらを兵士の精神構造論として、そこに表象される日本人の精神構造論として読み解いた。その成果は、『理論と動態』(14号、2021年)の特集「兵士の『生と死』をとりまく社会」の5本の論文として結実した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は次の諸点にある。一つ、社会学と宗教学をすり合わせて、それぞれの関心・理論・方法の共通・差異を明確にした。二つ、兵士の精神構造の固有の分析枠組みを構成し、それを検証した。三つ、もって兵士の精神構造の全体像(表層と深層、周縁と中心)を描いた。こうして本研究は、新たな兵士研究の領域を開拓した。本研究の社会的意義は次の点にある。男たちはなぜ兵士になったのか、どのように生と死が相克し、どのように死を受容していったのか。その兵士の精神構造の全体像を示すことで、兵士の死の是非、さらに戦争の是非をめぐるイデオロギーの対立の前に、全体的事実にもった認識・評価が必要であることを論ずることになる。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed the mental structure of soldiers (student soldiers and peasant soldiers) on the battlefield and the transformation of experiential memories of ex-soldiers after the war. As an interdisciplinary study of sociology and religious studies, this study was carried out by contrasting and reconciling each other's interests, theories, and methods. The conflict between life and death and the final acceptance of death by soldiers facing death, the circumstances that drove them (ie, Seiken, and the state), the emotional embodiment of the ideology of the times, the persistence and oblivion of war memories after the war, and the complicated feelings about the war dead. We deciphered them as analyses of the mental structures of soldiers and Japanese people represented there. The results came to fruition as five articles in the Special Issue "Society Surrounding Soldiers' Life and Death" in Theory and Dynamics of the Institute of Social Theory and Dynamics (No. 14, 2021).

研究分野：社会学

キーワード：日本兵士 精神構造 生と死 慰霊 記憶 アジア太平洋戦争 学徒兵 農民兵

1. 研究開始当初の背景

アジア太平洋戦争期の日本兵の戦争体験を記した文献資料は多いが、戦争体験の認識・記憶を精神構造論として捉え、かつ個人体験の集積として歴史体験の全体像に迫った研究は、まだ少ない。ここで戦争体験の全体像とは、次のことをいう。一つ、兵士が戦地・戦場で体験し、遺書・手記・日記・手紙等(手記と一括する)に記録し、戦後にそのまま書籍等として刊行された戦争認識の全体をいう。二つ、兵士が戦後に戦争の記憶を抱き続け、語り、書いた戦争認識の全体をいう。三つ、戦争認識の中身の全体性をいう。まず生から死へ、すなわち生者・兵士が戦死者・兵士及び死自体について抱いた認識の全体をいい、次に死者から生者へ、すなわち生者・兵士が死者・兵士の「声」「まなざし」を介して認識した戦争体験の全体をいう。四つ、イデオロギーから個人のメンタリティに及ぶ意識・感情の認識次元の全体をいう。本研究は、兵士の戦争体験を、先行の記録・研究にみる戦前・戦後の兵士の多様な戦争認識を精神構造として統一的に読み解く視座と枠組みを提示し、その検証を行うことを意図した。もって本研究は、(元)兵士の語りや刊行物、研究にみる多様な戦争認識の理解に道筋をつけ、またその中から兵士の戦争体験・認識の研究に新たな知見を得ることをめざした。

2. 研究の目的

本研究は3つの課題を定めた。一つ、兵士の自己認識の分析である。本研究は、兵士の自己認識を4つの精神共同体、すなわち天皇・国家・祖国の表象からなる「忠義の共同体」、戦友の表象からなる「友愛の共同体」、家族の表象からなる「恩寵の共同体」、生の表象からなる(生の意味を問う)「自由の共同体」の共存・選択・交錯のセットとして分析した。二つ、兵士の他者認識の分析である。ここで他者とは、日本軍兵士にとっての他者、すなわち兵士が戦地・戦場で接した植民地人、戦争状態にあった中国人、占領地のアジアの人々をいう。本研究は、兵士の他者認識をイデオロギーと個人感情が混然とした「共感」「憐憫」「恐怖」「敵意」の心的過程の連鎖として捉えた。それは兵士の自己認識と表裏の関係にある。自己認識は他者認識の鏡であり、他者認識は自己認識の鏡である。三つ、兵士の精神構造の分析を社会学と宗教学の視座・関心を対照・交差させるかたちで行った。社会学と宗教学の一つの対照として、社会学は、生者を基点にそこから死者(死の意味)を捉える。宗教学は、死者を基点にそこから生者(生の意味)を捉える。そしてそれらは、兵士の精神構造の中でたえず往還する心的過程としてある。その分析は、生と死の相克を生きた人間・兵士の精神構造の研究の重要な課題となる。

3. 研究の方法

本研究は、兵士の精神構造を分析した。そのための資料は3つに大別される。一つ、アジア太平洋戦争時に戦地・戦場で兵士が書いた手記である。二つ、元兵士が戦後に語った体験談、書いた回想録等の記録である。三つ、元兵士(や家族)による戦没兵士の慰霊に関わる集会的・個人的な行為である。本研究は当初、元兵士の聞き取り、戦没兵士の慰霊に関わる儀礼・行為の調査・観察を予定していた。しかしコロナ禍の影響で、それはいくつかのケースを除いて思うようにならなかった。そのため本研究は、次の作業が中心となった。一つ、兵士の精神構造の分析枠組を洗練すること。これは理論構築の作業となった。二つ、国会図書館や防衛研究所、自治体の図書館で(元)兵士の手記を収集すること。国立国会図書館の遠隔複写サービスにより多くの論文を入手することができた。アジア歴史資料センターのホームページ掲載の戦争関連資料も、貴重で

あった。さらに元兵士の家族の手元にある手記のパソコンへの入力作業を行った。青木は、福井県鯖江市の戦没兵士の遺族の紹介により、インターネット掲載の手記をパソコンに入力した。これらの手記の分析と解釈には、森岡清美や大貫恵美子、鹿野政直等の兵士の精神構造の先行研究が参照された。三つ、わだつみのこえ記念館、靖国神社・遊就館、大和記念館等の戦争関連施設で展示物を閲覧し、職員・学芸員の話聞いた。ここでも施設のホームページ情報が有用であった。四つ、戦没兵士を慰霊する儀礼の参与観察を行った。また、広島県と長崎県の慰霊碑・忠魂碑の調査と見学を行った。これらの資料収集は、コロナ禍の影響のため、連続的というより断続的な作業であったが、それでも当初の研究期間（2018年～20年度）及び延長期間（2021～22年度）を合わせて、当初の調査予定を完了することができた。

4．研究成果

研究分担者・西村は2020年度で予定通り調査を終え、2021～22年度は、コロナ禍のため資料収集が十分にできなかった代表者・青木が、調査を続けることになった。本研究に関わる研究活動として、一つ、青木・西村及び戦争研究者による研究会（生と死研究会、各年3回のペース）を行った。そこでは本研究の主題をめぐる議論、すなわち兵士の精神構造の分析に社会学の方法と宗教学の方法はどのようにジョイントできるかについて、議論が重ねられた。また青木は、部落解放同盟広島県連合会・歴史社会構造部会の研究会（広島県三原市の人権文化センターで毎月開催）に参加し、近代・戦争・部落差別をめぐる研究報告を聞き、報告を行い、その中で被差別部落民の近代・戦争に関わる体験等を収集した。三つ、本研究の資料収集と研究活動の成果は、社会理論・動態研究所の研究紀要『理論と動態』14号の特集「兵士の『生と死』を取り巻く社会」における青木・西村の論文を含む5本の論文として結実した（青木「兵になり兵に死す - 農民兵の精神構造をめぐる一考察」、西村「『戦争体験』と慰霊に関する宗教学的アプローチの再検討」）。また、岩波書店刊の『戦争と社会シリーズ』第1巻に青木が論文投稿した（「兵になり兵に死す 学徒兵の精神構造をめぐる一考察」）。同書は、西村が編集委員に加わって刊行された。

これらの活動により兵士の精神構造の研究が進み、精神構造研究の主題の拡大がもたらされた。一つ、男たちはなぜ兵士になったのか、どのように生と死が相克し、どのように死を受容したのか。兵士の精神構造の全体像を分析・解釈の枠組みにより示すことで、兵士の死の是非、さらに戦争の是非をめぐるイデオロギー対立以前に、全体的事実に則った認識・評価が必要であることが確認された。二つ、生から死を問う社会学と死から生を問う宗教学として対照された社会学と宗教学に関わり、また宗教社会学と宗教学に関わり、兵士の精神構造を分析する視座・方法・理論のすり合わせが行われ、戦争社会学、戦争宗教学の構想への貴重な一歩が共有された。例えば西村による、戦争宗教学における戦争体験研究の、テキスト分析を中心とした言語論的転回と、集合的・個人的行為の分析を中心とした行為論的転回についての議論は、社会学における生活史分析と参与観察の理解に貴重な示唆を与えた。三つ、本研究は、兵士の精神構造分析の射程を広げた。青木の関心に照らして言えば、兵士の精神構造の分析は、学徒兵だけではなく農民兵士の精神構造の分析、被差別部落出身兵士の軍隊内差別と糾弾闘争の分析、兵士の精神構造と入隊前の「夫や息子」「臣民」の精神構造の分析へ拡大された。入隊前の精神構造に関わって、治安維持法による思想犯の逮捕・拘禁・転向、最後は臣民になるという精神変遷の劇的展開は、兵士の精神構造の変遷の分析にとって象徴的な意味を持つ。・・・これらはいずれも、戦争研究として未踏に近い課題であり、本研究に続くべき兵士の精神構造論の課題である。本研究は、当初の予定の達成の上に、このような課題群の発見と戦争研究の新たな展開を促すものとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 青木秀男	4. 巻 4
2. 論文標題 戦争社会学研究会の設立の思い出に寄せてー戦争社会学研究会、これまでの10年と今後のあり方	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 114-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木秀男	4. 巻 14号
2. 論文標題 兵になり兵に死す：農民兵の精神構造に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 理論と動態	6. 最初と最後の頁 47-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.51112/14/46	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青木秀男	4. 巻 1177
2. 論文標題 兵士の精神構造を読み解く	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 青木秀男	4. 巻 4
2. 論文標題 軍都広島と福島町 - 仕事と生活を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福島町資料作成委員会資料集	6. 最初と最後の頁 44-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 蘭信三・石原俊・一ノ瀬俊也・佐藤文香・西村明・野上元・福間良明編（青木21-44頁）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 236
3. 書名 「戦争と社会」という問い（シリーズ戦争と社会1）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西村 明 (Nishimura Akira) (00381145)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------